

細谷恵志博士（文学）学位請求論文審査報告書 論文題目：「明代朱子学と崎門学の研究」

本論文は朱子学の明代における継承とその日本への影響を論じ、さらにその実践内容の具体を論じたものである。

今日、明代の朱子学は宋代の朱子学、明代の陽明学を超ええないとされるが、この論文は近世日本で山崎闇斎を通じ、正当に受容、評価されたとして、明代朱子学の再評価を試みたものである。

論文は三部で構成される。第一部には明代初期の代表的朱子学者薛瑄、丘濬、胡居仁等を論じ、第二部では薛瑄の影響を受けた江戸初期の儒学者闇斎を論じる。また第三部では『朱子家礼』により冠婚葬祭における朱子学の実践内容を述べる。

まず「序論」で朱子学の基本概念が述べられ、薛瑄が宋代朱子学を忠実に継承しながらも、独自の見解をももったと指摘する。以降、第一部「明代朱子学論」として「1 明代前期における朱子学の動向」でその概要をいう。以降薛瑄論が展開され「2 山西省河津市万荣県平原村薛氏家廟及び薛貞について」で父親薛貞との思想的影響関係を言い、系譜を述べる。続いて「3 薛瑄について」以下「4 薛瑄の思想、5 薛瑄の『読書録』とその修養説、6 薛瑄の理学について、7 薛瑄の政治哲学、8 薛瑄の心性論について、9 薛瑄の詩について」で薛瑄の全容を述べようとする。

今日薛瑄は「明代理学の開祖」と呼ばれる。細谷氏は薛瑄の朱子学理解を朱熹の教えを一書にまとめた『性理大全』の読解と批判にあるものとし、摘録して成った薛瑄『読書録』を評価する。すなわち薛瑄とその河東学派が心性を涵養するのに性を求め、氣に性を求めるべき「復性」を提唱、この具体的な表れが道德の実践を通じて性を養う必要があるとする主張を是とする論となっている。

そして今日通説とされる薛瑄が朱子の祖述者にすぎないという評価に対し、必ずしも無批判的に朱子学を受け入れたのではないと主張し再評価を求める。具体的には、宋の理学を受け継ぎながらも、朱子の「理気説」を取らず、薛瑄の主張が周子の「太極図説」によると考えたところにあると結論づける。それは朱子の「理が氣に先んじて在る」とする説をとらず、むしろ理と氣は単なる合一ではなく、理が主であり氣を客と捉えたことを指す。

さらに細谷氏は明代、朱子学が統治階級の統治思想とされ、科挙を通じて官学化し、権威の中に置かれたことで朱子学の根幹の精神が劣化し、学問のための学問に堕したと考える。その評価は宋代朱子学の純粋な継承をした薛瑄等が正統な位置にあるとする。

そのことは丘濬、胡居仁論に明らかであるとして薛瑄論に続き「10 丘濬の『学的』における道統の意義について」では丘濬を論じる。その著『朱子学的』を取り上げる。そこでは朱子の教えが「下学」以下「道統」まで20類に分けられているが、「道統」を取り上げる。ここには朱子に至る系統図が示され「伏羲」以降「神農－黄帝・堯－舜…孔子…孟子…周子－程子・張子－朱子」と継承される学統の意義をいう。それを血族によらず「心」と「道」との継承関係を示しているものと解釈し、丘濬の提示を特筆した論である。また第一部最終の「11 胡居仁『居業録』に見る「心」について」では胡居仁が朱子学、儒学を是とし、老荘や釈氏を否とする学的態度を評価している。

「道統」を意識した胡居仁は「心」の在り方に「誠」と「敬」の重要性を説いた論であり、丘濬の『学的』、また薛瑄と同じく、宋代朱子学をなぞっただけであるという今日的評価には同調しない学的態度であったことを強調する。

こうして薛瑄と同時代の朱子学者丘濬、胡居仁を論じて、明代には模倣ではなく、朱子学が正統に継承されたものとの評価を下している。

第二部では山崎闇斎の朱子学理解を述べる。闇斎の『文会筆録』に薛瑄『読書録』の引用が多く、この書を契機として明代朱子学が凡庸ならざる学であると認めるに至ったと語る。論文ではタイトルを「『文会筆録』に見る明代朱子学」とし、「1 山崎闇斎とその学風、2 山崎闇斎『文会筆録』に見る明代朱子学 - 『大学衍義補』を中心として、3 山崎闇斎『文会筆録』に見る胡居仁の思想、4 山崎闇斎の教育思想と『大和小学』、5 山崎闇斎『關異』に見る倫理思想について、6 山崎闇斎の主敬思想と『敬齋箴』について、7 山崎闇斎と日本の心」の7編を収めている。

ここに闇斎が薛瑄『読書録』、丘濬『学的』、胡居仁『居業録』等で明代朱子学の根幹を見出し、そこで「朱子学の純化」、「真の学問の追求」そして「道徳の実践による社会への貢献」等が述べられる。これによって闇斎の朱子学理解が影響されたと認め、さらには朱子学がもつぱら為政者に求められ、庶民への道徳観念の強制とはならなかったものと述べる。

崎門学は宋代朱子学に忠実であり、近世にあって、幕府官学の担い手林家の学的内容とは一線を画しているとし、さらに朱子学批判から生まれた陽明学に対しても否定的な立場に立ったとした。要するに闇斎の思想には基本に朱子学を継承した明代朱子学者の影響があり、闇斎において実践された内容評価するものになっている。

このことは朱子学が近世日本で受容された時、朱子学を唱導した林羅山を始祖とする林家の学問がやがて徳川幕府の政治的指導原理として受け入れられ、さらに林鳳岡が大学頭に任ぜられ、林家の私塾「昌平黌」は幕府直属の公的高等教育機関となり、官学として日本においても統治階級の統治思想となって定立されたことも無縁ではない。それはむしろ堕したのものとして細谷氏は本来朱子学が説くところではなく純粹に人間関係における自然の在り方がその根幹にあるものと主張する。その表れは『朱子家礼』に具体化されているというコンセプトにつながっていると考えるが、近世日本におけるこの思想の真の受容は林家というよりは闇斎において実現したとする。

このように、明代に継承された朱熹の学説は明にあっては薛瑄、丘濬、胡居仁などによって受け継がれ、またほぼ同時代を生き、明代朱子学者の主張する内容を正統な朱子学反映として忠実に学んだ闇斎において日本でも実現したのだという。

崎門学はやがて神道とのつながりをもって「垂加神道」を立てるが、ここには理気二元論と通底し、これが国家神道等とは異質であって、権威や政治的イデオロギーなどとは無縁である。むしろ『日本書紀』神代巻に根源を求め純粹に本来の人間の結びつきを尊ぶ唯一の神道として顕れたものと高く評価するに至る。

山崎闇斎の実践を示すものは第三部にあって、『朱子家礼』の具体こそが朱子学の本質を一般にわかりやすく説いたものとして、『朱子家礼』観を論じる。そこでは「1『朱子家礼』について」から、「2我が国の婚礼に見る『朱子家礼』の影響について、3水戸の儒葬に見る『朱子家礼』の受容について、4曲阜における儒葬と我国の神葬 - 『朱子家礼』との比較を通して、5水戸を中心とした神葬の淵源とその展開」をおさめ、水戸学に及ぼした影響についても触れている。ここでいうのはなによりも、日常における営みにこそ朱子学の本質があるものとするのが、細谷氏の基本的な朱子学についての評価そのものである。

以上のように朱子学の明代への継承、また明代朱子学と近世日本における山崎闇斎の受容とに関する研究は従来手薄であり、明代朱子学を著しく阻害していたものは一種の偏見による過小評価ではなかったかと細谷氏は主張している。その意味でいえば本論文は斯界の今日的評価の再考を求め、一石投じたものと評価しえる。

一方、本論文は既発表の論文からなる一本であるためか、たとえば「薛瑄」及び闇斎に関する家系、経歴等、朱子学をめぐる環境などについて前書きとしておかれ、各節に繰り返され、重複する記述が少なくない。これは本論文の整合性を求める時惜しまれる一点である。

ただ、朱子学の明代における受容、さらに近世日本に与えた影響の一端が「崎門学」において実践されたとする見解は細谷氏の主要な論点となっていて、それらはよく整理された論として一貫している。また、従来研究史においては積極的な評価の対象となっていない環境に新見解を提出したことの意義は深い。

したがって、同一の内容が繰り返されるというような懸念事項もあるものの、本論の主張内容はそうした懸念を払拭するのに十分な内容を備えているというべきである。

以上の審査内容と、本年1月30日に開催された公聴会の結果を踏まえ、審査委員全員の合意を得るに至り、本論文に博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいものと認める

平成28年2月25日

主査 立正大学大学院文学研究科国文学専攻
教授 岡田 袈裟男

副査 立正大学大学院文学研究科国文学専攻
教授 島村 幸一

副査 立正大学大学院文学研究科史学専攻
教授 野沢 佳美

副査 大東文化大学大学院文学研究科中国学専攻
元教授 濱 久雄